

水田

～唐津地方で開花した水稻栽培。景観や環境も作る～

唐津市の菜畑遺跡は日本の稲作発祥期の遺跡として有名である。縄文晩期後半、今からおよそ2500年前の時代にさかのぼる。最も古い水田は広さ18平方メートルの小さな4枚の田。原の梅白遺跡でも近い時代の水田跡が発見されており、唐津平野は、大陸や朝鮮半島からいち早く稲作文化を取り入れていたようだ。

弥生時代、古墳時代を経て近畿地方に成立した大和政権は、公地公民制で土地は天皇のものとしていたが、税金を確保するために三世一身法などで開田を求めたことなどから、次第に土地の私有が広がっていく。資力のある豪族たちが荘園を拡大し土地の公有制は瓦解していく。

戦国時代を制して天下人となった豊臣秀吉は、各地を検地(測量)し、これまでの土地所有関係を整理、土地制度を大きく変えてしまった。江戸時代に入っても太閤検地の手法にならい地方大名は検地を行い、領地の石高の把握に努めた。同時に、藩経営を安定させるため新田の開発に力を注いだ。初代唐津藩主・寺沢志摩守広高は、松浦川の大改修で、和多田村、鏡村に大規模の新田を作り、今も鏡地区には新開の名前が残っている。農作物を守るため、虹の松原の植樹に努めたことも知られている。

明治末から大正初めにかけて、全国で耕地整理事業が行われた。道路と水路を基盤目場に規格化して農作業の効率を高め、常に問題となる水利の改善を図ったもので、この時、唐津地方の水田の姿がほぼ固まった。その後、圃場整備事業などで補完され、農作業への機械化にも対応してきた。

平坦部が松浦川など大きな河川流域に限られている唐津・東松浦地方の農民は、昔から傾斜地に水田を開いてきた。山間部や海岸沿いの斜面に点在する棚田は、作業効率の面で平野部に劣る宿命だが、農民の労苦と技術がつくり上げたその美しい景観は人をひきつけ観光名所となっているところも少なくない。相知町蕨野、肥前町大浦、玄海町湯野浦などが代表的なところだ。

水田は稲や麦を作る食糧基地であるだけでなく、大雨時の洪水調整池となる。また、蓄えられた水は温度調整の役目も果たし、地下水の増加を促し、余分な窒素分を取り去るなどの効果も指摘されている。後継者不足や農業政策のため、地区によっては耕作放棄による荒廃水田が増えているという話もあるが、水田は環境を含んだ大きな視点から見なければならぬ。

分野 産業

地域 全域

◎地図・写真・統計資料など



蕨野の棚田
(田中明氏より)



蕨野の棚田
(田中明氏より)

◎引用・参考文献(出典)

- ◆『唐津市史』
- ◆『唐津市の文化財』唐津市教育委員会
- ◆NPO法人「蕨野の棚田を守る会」

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html